加納大尉夫人

佐藤愛子

18

加賀大聖寺藩士

[illegible]

加納大尉夫人

昭和四十年二月十日　印刷
昭和四十年二月二十日　発行

定価　三八〇円

著者　佐藤愛子
発行者　豊島清史
印刷者　山森忠一

発行所　株式会社　光風社
東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(二九一)〇一三八番
振替東京　五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

二人の女　三
猫　六七
島　一〇三
加納大尉夫人　一六九

装釘　高橋忠弥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二人の女

1

妻が笑っていた。権藤の妻も笑っていた。二人の笑い声はよく似ていた。さも愉快そうな、けたたましい笑い声だった。だが二人は本当におかしくて笑っているのではなかった。笑い声が似ているのは、おそらくそのためであろう。その笑い声の底から、湧き上ってくるように、権藤の妻のへんに若い、高い声が聞えてきた。

「ですからおくさま、さっきから申し上げておりますようにでございますね、家庭を守るのは、なんてったって主婦でございますよ。おありになる方はおありになるように、ない方はないように、それぞれその範囲において将来の設計を……」

「将来のことなんて……」

と妻の声がいきなり話の腰を折った。

「そんなこと考える暇、ありませんわ。先のことなんか、なるようになれと思っていますわ。とにかくうちじゃあ、今しなくちゃならないことで手がいっぱいで……」

「あらまあ、そんなこと……おくさまったら」
権藤の妻の声が負けずと追いかけた。
「保険と申しますのは、これはおくさま、安心料でございましてねえ。日々、心安らかに暮せることの有難さ、それがどんなに貴いものか、お入りになってはじめておわかりになるものでございますよ。たった月に千円か二千円のお小遣いで……」
「保険はもう四つも入っていますのよ。でもちっとも心安らかじゃありませんわ。むしろ集金に来られると面倒くさくて、イライラしちまいますの」
「あらまあ、おくさまのおっしゃりよう……」
権藤の妻は笑った。
「おくさまって、ほんとうにおしあわせでいらっしゃいますわねえ」
「倖せか倖せでないか、そのひとが死んでみなくちゃわかりませんわ！」
「まあ、あんなことばっかり……うちではねえ、おくさま、権藤ともしょっちゅう申しておるんでございますよ。原口さんはほんとうに結構な身分だって……この節、筆一本で食べて行こうとすれば、もう仕事なんてあれこれ選んでいられないっていいますの。いくらないないっておっしゃったって、原口さんのお仕事ぶりを拝見してれば、ちゃーんとわかりますですよ。こちらさまじゃ厭なものは一切お書きにならないですむのですもの」
「原口はノラクラ者なんですのよ。なにも仕事を選んでるわけじゃありません」

「まあ、おもしろいおくさま――」
二人は笑う。妻がいった。
「全くうちの原口ときたら、怠け者の上に贅沢好きなんです。それでまたお人好しときてますの。ですから、お金なんか一文もないのに、外からはいかにも金持ちのように見えるらしいですわ。ほんとにやりきれませんのよ」
妻の声は次第に高くなる。それは彼の聞き馴れた声で、ある高さに達するとよく透るなめらかな声になり、まるで楽しい役を演じている舞台の女優のように響く。
「とにかく今だって、うちは大へんな瀬戸際にきていますのよ。この家を新築したお金だって、まだ半分以上、払ってませんの。払えないんですわ」
「あら、でもおくさま、わたくしちゃーんと知っておりますんですよ。せんのお家もいい値でお売りになったって……」
「とんでもない……」
嘲るような妻の声がいった。
それはしかし、権藤の妻にというより、彼に向っていったのだ。妻は実は彼のことが不満でならないのだ。彼が今度目黒の家を、ある代議士に売ったことが。それはつい一年前までは彼らがそこに住んでいた家で、今ではアメリカ人に貸している家であった。彼はもともとその家を売って、今度の家に越すつもりだったのである。だからその家がなかなか売れなかったので、彼は取りあえず

家が売れるまで、それをアメリカ人に貸すことにしたのだ。それがそもそもの誤りであつた。妻は最初からその家を売るのに反対だったのだ。家は売れたが、しかしその売値はあまり香しいものではなかった。妻はそれを彼の世間知らずのせいにした。その上今度は代議士への明渡しの期日も迫って来ているのに、一向にアメリカ人がそこを立退く気配がなく、アメリカ人に立退かせるためには、彼がどこか気に入った家でも見つけて来てやるか、さもなければ若干の立退料ぐらいは払わなければならないという、厄介な状況を呈しはじめていたのである。

「とにかく、うちでは原口は、わたしよりも年が下なんですのよ。だから保険に入ったところで、どうせわたしの方が先に死にますから……」

話を早く切り上げようとするように、妻がいった。

「とんでもない！　おくさま――」

権藤の妻は、慌てて妻の言葉を遮った。

「少しぐらい年下だって、下の人が生き残るとは限りませんですよ。殊に女の寿命はうんと伸びておりますですからねえ。三つや五つ違うくらいじゃ、そりゃきっと旦那さまの方が先ですわよ。ええ、ほんとうでございますとも。早い話がおくさま、男の人は毎日外へ出かけますでしょう。それだけでも家にいる女より、自動車に跳ねられたり、上から鉄板が落ちて来たりする事が多いわけでございますからねえ」

彼は紅茶をいれるために魔法瓶を引き寄せた。いかにも権藤の妻らしいいい方だと思った。権藤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の妻なら恐らく彼がその場にいても、夢中でそのくらいのことはいうだろう。
「でもね、わたしはっきりいって保険が大嫌いなんですの」
もうこれ以上は話したくないというように、はっきり妻はいった。そういう妻のいい方を聞くと、思わず彼はひやりとする。そしてそんなときの妻の顔が、彼にはよく見えるのだ。しかし権藤の妻は今までのどの声よりも高く叫んでいた。
「まあ！　困りましたわ、おくさま、お嫌いだなんて！」
それと何時に電話が鳴った。権藤からだった。
「女房、行ってるだろ」
声を潜めるようにして権藤はいった。
「ああ」
「そうか、すまんな。いくらいってもきかないんだよ」
「うちじゃこういうことは、女房が決めることになってるんだよ」
「わかってるよ」
権藤はいった。
「まあ、奥さんによろしくな」
「ああ、いっとくよ」
「すまんな、いつも」

電話は切れた。
「とにかく一度主人に相談いたしまして……わたしの一存で、決めてしまうわけには……」
玄関の方で妻の声がいっていた。
「ええ、ええ、そりゃあ、勿論そうでございましょうとも。何といっても保険を掛けられるのは、御主人さまのお身体なんでございますものねえ」
権藤の妻の笑い声が、玄関の天井に響いていた。
「ほんとうに失礼申し上げました」
彼には見えなかったが、玄関の板の間に立った妻が、権藤の妻に向って馬鹿丁寧にお辞儀をする姿が、彼の目に浮かんだ。

2

彼の愛人はアパートに住んでいた。アパートは墓地につづく高台にあった。愛人の部屋の窓の向うは墓地の草むらで、反対側には崖下の街がひろがっていた。その街は共同便所の小窓から見渡せた。彼が行くと、いつも愛人はその四畳半の部屋の中央に丸い卓袱台をひろげて投稿雑誌へ送る小説を書いていた。
「今日あたり、と思っていましたわ」
彼がドアを開けると、彼女はいつもそういった。それから彼の上衣を脱がせてハンガーに掛け、

冬ならば用意してあるカーディガンを着せかける。彼女は彼の周りをあちこちして、肩のフケを払ったり、首筋に指を置いて揉むようなことをした。

「なにしてらしたの、昨日？」

それから彼女はいう。彼が答えると、おとといは？　といい、更にその前は？　といい、次第に遡(さかのぼ)って、この前に彼が来た日まで行き、そうして意味もなく笑いこける。

彼女は多少痩せていた。彼の妻とは反対に背が高く、なよなよしていた。二人が知り合ってから、もう四年目になろうとしている。だが彼女はいまだに初々(ういうい)しいような、甘えたような丁寧な言葉づかいをした。そんなもののいい方の蔭には、なにか彼にもわからないが、彼女自身気づかないものが隠れているような感じがした。

彼は部屋に入ると、いつも彼が坐る、押入れと壁の間の柱にもたれるようにして坐った。彼が紅茶好きだということを知ってから、彼女は彼が紅茶をくれという前にそれを出さねばならないと、固く思いこんでいるようだった。だがその紅茶は彼の家のものと違ってうまくなかった。彼は一日に何杯となく紅茶を飲む習慣がついていたので、彼の家では妻も女中も全く投げやりないれ方をした。それは薄過ぎたり濃すぎたりした上に、女中がいれると砂糖が多過ぎ、妻が入れると少な過ぎた。それでも彼の家の紅茶は、愛人のよりは遙かにうまかった。愛人の紅茶は、彼の家で使用している紅茶の、三分の一の値段で買える紅茶だった。

愛人はいった。

「疲れていらっしゃるみたいね」
彼女はいつも彼の健康を案じていた。そして彼女にそういわれると、いつも急に疲れがどっと出てくるような気がした。
「目黒のお家、どうなって？　アメリカ人はまだ頑張ってて？」
彼がまだだと答えると、愛人は眉をひそめ、「まあ、大変ねえ」といった。彼女は彼が煩わされている事柄に関して、いつも心配をしていた。彼は黙っていた。それからぼんやりと、後頭部を後の柱にもたせかけた。
「わたし、あれからあのあと、四十枚書いたわ」
それから愛人がいった。
「四十枚？　これは驚いた」
彼女が小説を書くスピードは、全く流行作家並だった。彼の友人が編集をしている投稿雑誌に、彼は二カ月に一つの割で彼女の原稿を持ち込んでいた。彼と彼女の関係を知らないその友人は彼女のことを軽い揶揄をこめて〈健気なひと〉と呼んでいた。
「どうしているね、あの健気なひと――」
「一生懸命にやっているよ」
そんなとき、彼はそう答えた。
彼女は綺麗でもなく、不器量でもなかった。綺麗でもなく不器量でもない娘は、自分のことをど

ういう風に考えているものなのだろう？　ときどき彼はそう思うことがある。しかし彼が彼女とこういう関係になったのは、おそらく彼女が綺麗でもなく、不器量でもないからだった。彼女は平凡だった。いつまでも年をとらないように見えるのは、そのためだったかもしれない。彼女はもう間もなく三十になる筈だった。電車の中や役所などでよく見かけるが、あとで思いだそうと思っても、どういう顔だったか思い出すことの出来ない娘たちの一人、彼女はそんな感じがした。

彼女の話では、彼女の父は三十年勤続の地方官吏で、母は田舎町で茶道と生花の師匠をしているということだった。彼女は彼と知り合った頃は、中学校の国語の教師をしていた。だけど田舎では、今でもわたしのこと、教師をしていると思ってるのよ、彼女はそういい、彼と目を見合せようとして彼を覗きこみながら、いかにも面白そうにクスクスと笑うのだった。

「ほしいと思ったときに、いつでも君がそこにいる、そういう状態がほしいんだよ」

殆ど無理やりに彼女の勤めをやめさせたとき、彼はそういったのだ。それは彼の本当の気持だった。黙って坐っていたいと思うときに、何も説明せずに坐っていることの出来る部屋が、その頃、彼はほしかったのだ。

彼は月々、若干の金を彼女に渡していた。彼女は切り詰めた生活をして、その定った金以外には、決して彼に負担をかけるようなことのないようにしていた。アパートももう少しいいところ、せめて専用便所くらいついている部屋に越した方がいいのにと思っていたが、彼女は賛成しなかった。

「わたしはこれで沢山」

彼女はいつもただそういうのである。愛人は丸い卓袱台の向う側に坐って、彼の方を向いてしゃべっていた。

「ねえ、この女が公園で男を待っているところ、ここで本当はテーマがぐっと出なくちゃいけないのよ。それなのに、なんだかどうも弱いでしょう？　そう思わない？　といってわたし、あんまりじかに説明したくなかったの……」

それから愛人は彼を見ていった。

「どうなさったの？　またアメリカ人のことを考えていらっしゃるの？」

彼は事実、そのことを考えていた。今日、彼は、アメリカ人が気に入って、すぐに引越してくれるような家を探して歩いたのだ。彼は周旋屋の南川と一緒に、四軒の家を見た。だが四軒とも今、彼が貸している目黒の家に比べて、問題にならないものばかりだった。一つは家賃の割に間数が少なく、庭も狭かったし、もう一つは荒れ放題に荒れていた。あとの二つは環境が悪い上に、とてもあのアメリカ人の気には入るまいと思われるような粗悪な普請だった。

「こっちへおいでよ」

彼はいった。そして愛人の方へ手を伸ばした。

「え？　なあに？」

愛人がいった。彼女はこんなとき、いつもわざと気がつかないようにそういうのだ。だがそういうときの愛人の声は、本当は彼女がそれを知っていることをあらわしていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com